

〔新刊書評〕

加藤邦子著
『両親のペアレンティングが
未就園児の社会的行動に及ぼす影響』

風間書房, 2017年

高丸理香

共働き夫婦が増加してきている現代において、母親は父親とともに子育てをすることを期待し、また父親も子育てに関与したいと考える傾向にあることはメディアなどでも広く知られるところとなっている。しかしながら、我が国において夫婦が協働で子育てをするといった考え方については認識されはじめたばかりであり、どのように関与しあうのかについては模索の段階だと思われる。この点において、本書は、母親と父親がどのように協力し合いながら子育てをしているのか、そして、両親の協働による子育てが子どもにどのような影響を与えているのかについて理論的に応えるといった新たな試みをしている優れた一冊であると言えよう。なお、本書は、2010年度にお茶の水女子大学に提出された博士学位論文『父親と母親のペアレンティングはどのように未就園児の社会的行動に影響を及ぼすのか—包括的理論の構築とその実証的検討』を改稿したものである。

本書の構成は、序章と第1章～第7章で成り立っている。序章では「日本のペアレンティングの状況と研究の背景」について述べ、両親のペアレンティングの有り様を論じるに資する理論的な研究の蓄積が必要であることを指摘している。第1章では、包括的な理論の構築に先立ち、ペアレンティングや子どもの発達に関する理論を詳細かつ丁寧に概観し、第2章にて基本的概念と理論的枠組みを提示している。第3章では、ペアレンティングおよび子どもの社会的行動（または発達）の先行研究を整理し、第4章にて2つの分析モデルを設定したうえで、第

5章および第6章で各々の課題を実証的に検討している。最後に、第7章にて2つの分析モデルの検討結果を考察し、両親のペアレンティングが子どもの社会的行動に影響を及ぼす「プロセスモデル」について論じている。以下で、各章の論点を紹介していくこととする。

序章では、子どもの社会的行動の発達においてペアレンティングに着目する意義について述べている。我が国における急速な少子高齢化にともなう人口変動による家族のゆらぎといった背景を受けて、家庭内における「新たなジェンダー関係の再構築」(p.9)が必要とされている。しかし、労働力としての女性への期待にたいする母親の就業率の低さや、育児を担う（担いたい）父親の増加にたいする父親の育児時間の短さなど、「母親のみが育児・家事を担わざるを得ない状況」(p.12)は依然として残存しており、このことは「個人の努力だけでは到達できない」(p.12)と述べている。すなわち、母親、父親が個々に家庭内のものごとに対処しようとすることには限界があり、夫婦間で相互にかかわりあいながら子育てをしていくことが第一だと唱えている。そして、子どもが両親を通して、家庭内から家庭外へと関係を広げていく発達のプロセスを捉えるうえで、Bronfenbrenner (1979)の生態学的視点を取り入れた包括的理論の構築が妥当であることを述べている。

第1章では、ペアレンティングと子どもの社会的行動に関する理論のレビューを行い、包括的理論を組み立てる意義について問うている。まず、石井クンツ (2009) の Involvement 理

論や Blumer (1969=1991) のシンボリック相互作用論などを概観しつつ、未就園児といった「集団に参加する前の子ども」(p.27)を対象とすることの着眼を得ている。次に、Blesky (1984)のプロセスモデルを詳細に吟味したのち、「親子をひとつのシステムとして捉えたモデル」構築のために援用することが適切であることを導き出している。ただし、Blesky のモデルをはじめ従来のペアレンティングに関する理論は母親を焦点化したものが多く、両親が協力しながら育児をするといったコペアレンティングの概念が欠如していると指摘する。このような理論的背景により、母親と父親による親機能のシェアという視点の導入、親の関与による子どもの社会的行動プロセスの実証、未就園児の社会的行動そのものの観察および評価、そして、家庭における社会的環境の要因を含めたプロセスモデルの構築を課題として挙げている。同時に、現代の複雑かつ多様な家族関係を勘案したモデル構築においては、従来の理論を組み合わせ包括的に検討していく必要性を詳説している。

第2章では、実証研究部分において用いる概念の定義および基本となる理論枠組みを提示している。第1節では、「未就園児の社会的行動の発達」「コペアレンティング」「両親と子どもとの関係性」「父親の育児量」および「父親役割の顕現性」というトピックにて、両親と子どもの相互関係性についての概念をいかに定義づけるか慎重に精査している。第2節では、投資理論および Involvement 理論による両親のペアレンティングへの援用と、アイデンティティ理論による「親であることのアイデンティティがもつ顕現性」(p.68)への適用可能性を図っている。さらに、育児不安研究や愛着理論における親子間の愛着行動やその影響を他の理論と組み合わせることの有用性を述べている。そして、これらの理論的枠組みを基本とした、2つの概念図を生成している。なお、概念図の1つ目は、母親と父親の要因が子どもとの関係性を高めるための理論的枠組みの提示(研究1)を、

2つ目は、Belsky のプロセスモデルに子どもの社会的行動を含めた包括的概念図の提示(研究2)を目的としている。

第3章では先行研究の検討が行われている。第1節は「子どもの発達の規定因」として母親と父親それぞれにおける、ペアレンティングと子どもとの相互関係性についての知見を概観している。第2節では母親、第3節では父親のペアレンティングに関する研究をレビューしている。特に、母親のペアレンティングでは育児不安、父親のペアレンティングでは育児量と役割・機能に焦点化しつつ先行研究を整理している。そして、第1節から第3節の知見における概念を取り入れ、分析モデルの基礎となる構造を提示している。

第4章では方法論および調査方法・分析方法、調査協力者の属性について説明がなされている。加えて、研究1における作業仮説を16項目、研究2における作業仮説を20項目、設定している。

第5章は研究1、第6章は研究2の実証的な分析における、変数の基本統計、変数間の相関、分析モデルの提示が行われ、第7章にて共分散構造分析結果についての考察が論じられている。研究1に使用されている変数は、「父親の育児参加」「父親役割の顕現性」「母親の育児不安」「母親の干渉的養育行動」「母親の子どもとの愛着関係」「父親の関係関与性」に関する31項目、研究2は研究1の使用変数に「子どもの社会的行動」に関する8項目を追加した39項目である。

研究1では、「育児に関する個別の理論で検討されてきた概念」(p.175)をBelskyのプロセスモデルに組み込むことで母親と父親によるコペアレンティングの構造を検討している。まず、母親のペアレンティングに関しては、育児支援があり、かつ育児不安が解消されることで、干渉的養育行動は減少し、母子間の愛着関係が高まる傾向が支持されたとしている。次いで、父親のペアレンティングを見ると、長時間労働ではなく、性別役割分業認識がリベラルであり、

子どもの数が少ないほど、育児参加が促され、それが子どもとの関係関与を高めていることを示している。また、父親役割の顕現性も父親の育児参加に影響していることを明らかにしている。これらの結果から、既存の理論を多角的に援用したモデルを設定することで、母親と父親のペアレンティングの構造を明らかにするといった目的は大筋において達成されたといえよう。しかしながら、異なる理論の接合点として重要な概念とされた「父親の育児参加」と、母親の育児不安との関連については有意ではなく、さらに、子どもの数が多いほど父親の育児量が少ないといった仮説とは反対の結果が出ている。この点について筆者は、両親のコペアレンティングの実践としては、父親の育児量を増やすといった単純なことではなく、母親からのニーズや子ども同士の関係性などの多様な状況に応じて夫婦間の相互協力関係を柔軟に調整していることが反映された可能性があると述べている。

研究2では、両親のペアレンティングによる子どもの社会的行動への影響についての実証的検討を行っている。その際に、研究1のモデルに Involvement 理論を組み込んだ理論の提示を行っている。つまり、研究1の「母子の愛着関係」および「父親の関係関与性」といった両親のペアレンティングの変数と「子どもの社会的行動」との関連性およびプロセス性が検討されている。その結果として、母親と父親のペアレンティングにより、子どもの集団場面における社会的行動が育まれることが明らかにされている。さらに、父親が子どもと一緒に遊びを楽しむといった相互性に加え、「子どもの感情調整」に関与することが、また、母親との「平常時の関係のよさ」だけでなく、「子どもがストレスを抱えた時の拠り所」や「母親と分離する時の探索活動の安定性」が、未就園児の集団における社会的行動を促進することが示唆されている。すなわち、母親や父親といったマイクロなシステムにおける相互関係性から、子ども同士、親以外の大人、教師といったメゾシステムにお

ける社会行動への影響のプロセスが実証できたといえる。

本稿にて取り上げた分析結果のほかにも、本書では多くの知見が見出されている。そのなかでも、これまで別々に検討されてきた母親または父親のペアレンティングの有り様を、既存の理論を援用しつつ1つの分析モデルのなかに組み込み、両親間の相互作用を含めた子どもへの関与やコペアレンティングのプロセスを提示した点は最大の成果であるといえよう。そして、母親と父親が共に子育てをすることが、子どもの社会的行動に影響を与えるといった相互関連性について、多様な変数を用いて具体的な示唆を得たことは意義あることだと考える。特に、夫婦が共に育児に関わるということや育児量の多少といった側面以外に、家庭環境や状況に応じて夫婦間でどのように子育てをするのかを相互に調整しあうことが鍵となることを顕在化したことは、複雑化・多様化する家族形態への応用可能性を拡げる端緒となるであろう。

筆者の当初からの関心点として、「家族の複雑化・多様化による子育ての難しさ」(p.5)が挙げられているように、家族形態に加えペアレンティングの有り方も今後はますます多様化するであろう。たとえば、両親のペアレンティングに子育てアプリやAIを活用した知育支援ロボットなどの新しいツールが用いられることによって、子どもの成長行動にどのような影響を与えるのかについては、学際的な検討課題となることが予測される。本書を嚆矢として、今後の筆者のさらなる展開をめざした研究報告が期待される。

